

# 富澤コラム21

## 平和と独立

理事長 富澤 暉

1月に西部邁氏が自裁された。氏に初めて会ったのは互いに50歳代前半だったが、その時から彼は反米で、「日本の独立」を人一倍強く主張していた。彼はその点で左右両派の一部に人気があつたらしく、没後1週間も経たぬ頃、あるテレビ局が彼の生前番組抜粋を紹介していた。その中で彼が「僕が防大で講演した時に、ある学生が『長いものには巻かれよ、寄らば大樹の陰、何が悪いんですか』と質問した。これには驚いた」と話していた。これを聞いた私は「その言葉は防大生自身のものではなく岡崎久彦氏（平成26年没）からの受け売りだ」と直ぐに理解した。

現に私が岡崎さんからその言葉を確かに聞いたことがあるからである。

そうはいってもその証拠を開陳できないのが残念だが、あの時、尊敬する大先生（防衛庁国際参事官当時から時にご指導頂いていた）からそう言われ「矢張り日本は小判鮫のように大魚にくつついて生きるしかないのか」と私は真剣に考えこんでいたのである。

ともあれ「アングロサクソンは強い。

アングロサクソンは怖い。だから決して逆らうな。常に従え。そうすれば日本は間違えない」と岡崎氏が言い続けていたことは文書として残っている。

今になって考えてみると、西部氏の反米・日本独立論も、岡崎氏の「日米同盟が全て」主義も極論である。現実の動きは常にその中間にある。両氏はそれを承知の上で、物事を分かり易くするために敢えて極論を述べ議論を盛り上げていたのではないか。

よく彼らの言動を調べてみれば、西部氏も国際協調を否定していないし、岡崎氏も「常に米国の言いなりになれ」などとは言っていないのである。

現憲法の前文に「平和」という言葉は四つもあるが「独立」という言葉はない。被占領下の憲法なのだからそれは当然なのであろう。しかし、昭和29年に制定された防衛庁（省）設置法と自衛隊法には防衛の目的として「平和と独立」という言葉が明記されており、それは今なお存続している。

平和と独立は本来矛盾するもので、共に100%の並立はあり得ない。平和を求めるなら独立はある程度譲らざるを得ず、独立を求めるのなら戦いの危険全てを排除できないのである。その均衡をどうとるのは、重大な政治・外交問題だがその決定のために我々一国民が何を為すべきなのか、厳しく考えて行きたい。